



本願寺派国府教区米山組が主催の
「要」を淨福寺本堂で勤めました。
追悼するという意味で、梵鐘の10
合掌を致しました。参加者と一緒に
市飯坂町にお住いの安田かず子さん
もフクシマに住んでいます。「安全
と安心のハザマで暮らす」ということ
「」というテーマで、約40分間福
島の現状などをお話しして頂きました。

いつも何度も

作詞 覚和歌子
作曲 木村 弓

呼んでいる 胸のどこか奥で
いつも心躍る 夢を見たい
悲しみは 数えきれないけれど
その向こうできっと あなたに会える
繰り返すあやまちの そのたびひとは
ただ青い空の 青さを知る
果てなく 道は続いて見えるけれど
この両手は 光を抱ける
さよならのときの 静かな胸
ゼロになるからだが 耳をすませる
生きていく不思議 死んでいく不思議
花も風も街も みんなおなじ

呼んでいる 胸のどこか奥で
いつも何度も 夢を描こう
悲しみの数を 言い尽くすより
同じくちびるで そつとうたおう
閉じていく思い出の そのなかにいつも

忘れたくない ささやきを聞く
こなごなに碎かれた 鏡の上にも
新しい景色が 映される
はじまりの朝の 静かな窓
ゼロになるからだ 充たされてゆけ
海の彼方には もう探さない
輝くものは いつもここに
わたしのなかに 見つけられたから

第5回 東日本大震災追悼法要をお勧めして

「東日本大震災追悼法要」を浄福寺本堂で勤めました。犠牲になられた方々を追悼するという意味で、梵鐘の10打を聞きながら全員で合掌を致しました。参加者と一緒に勤めした後、福島市飯坂町にお住いの安田かず子さん



A black and white portrait of a woman with short dark hair, wearing a dark blazer over a light-colored top. She is smiling and holding a small object in her right hand. The background is slightly blurred, showing what appears to be an indoor setting with shelves.

「子供達に一番影響が表れていました。」と言わ
れ、甲状腺ガンの問題や転校によるストレスについても触れられました。同じ日本人とし
て、重い課題を与えられた気がしました。
最後に参加者全員で木村弓さんの「いつも何度も」を歌いました。ウク
ライナ出身のナターシャ・ゲジーさんが
「人間は忘れる事によつて同じ過ちを繰り返してしまいます。悲劇を忘れないで下さ
い。そう願つて、私は歌を歌つていま
す。この曲はとつても可愛いらしい歌で
すが、とつても意味の深い歌詞をもつて
います。」とお話しされていますので、
いま一度この歌詞をよく読んでみますと、
本当に意味深い内容が書かれていること
に気がつきました。

実は、2002年に「淨福寺本堂改修
落慶法要」で木村弓さんに淨福寺の本堂
でこの歌を歌つて頂きました。その時に
いただいた記念の色紙には「いつも心躍
る夢を」と書かれています。歌詞の中に
「こなごなに碎かれた鏡の上にも新しい

景色が映される」とあります。が、グジーさんもチエルノブリ原発事故があつたために、日本にご縁ができ、日本人と結婚されて、この歌に出会つたのだそうですね。どんな時でも「心躍る夢を」ということなのですね。

私達も、いくつ歳をとつても「心躍る夢を」を忘れないようにしたいですね。

最近、私達は大切なことを忘れてはいなでしようか。たとえば、大切な教えを忘れてしまえば、人は人間の心を忘れてしまえば、人は人間の心を忘れてしまつて、同じ過ちを繰り返してしまいます。

被災された現地の方が「風評より風化が怖い」と言われます。風評もとても怖いのですが、それよりも風化のほうがもつと怖いと言われるのでです。ですから、今後もこの法要をぜひ続けていきたいと思ひます。

この度の法要にご参拝頂きました方には、心より御礼申し上げます。おかげさまで義援金は21,900円となり、福島の母子支援事業に寄付させて頂きました。

また、淨福寺主催ではありませんが、今年の7月8・9日に私が実行委員長となつての東北視察研修旅行を予定しています。参加ご希望の方は、お申し出下さい。

病いをもつ、 にもかかわらず…

住職 井上陽雄

に素敵だろうかと思ひます。この度の講演会で思い出した『癒しのユーモア』(著者・柏木哲夫)という本があり、とても面白い川柳が載っていましたので、この本に書かれていた文章をご紹介致します。

先日、看護大で「人生の最後、どう迎えたいですか。」というテーマで講演会がありました。上越総合病院院長の籠島充医師と東京都にある小平クリニックの山崎章郎医師のお二人の講演会でした。

山崎医師が、「皆さん、あと余命2か月と宣告をうけたらどうしますか?」と会場の皆さんに問い合わせられました。私の場合は、身辺整理ですが、山崎医師が「感謝の手紙を書いてはどうでしょうか?」とか「俳句や川柳などを書いてみてはいいのでは?」と言われました。

そこで、ある末期のガン患者さんの川柳をご紹介されました。

「ガンだとさこれでボケずに死にそうだ」「死ぬときもいっしょ仲よくしようガン」「おいガンよ俺が食わせているんだぞ」「本家より分家がげんき俺のガン」

亡くなる三日前の会話

Aさん「お世話になりました」私(山崎医師)「あちらで、いつかお会いしたら、川柳教えて下さい」Aさん「いや、川柳といわず、万流教えますよ」世の中には、すごい達人がいるのですね。自分の最後を川柳で詠めたら、どんな

医療や看護の現場が川柳に詠まれることも多い「医療川柳」というのもある。

「お守りを医者にも付けたい手術前」

「串刺しの心と書いて患者です」

「病院とは元気な人が集まる所らしい。」

「健康でなければできない医者通り」

待合室の患者さん同士の会話。「最近鈴木さん見かけませんね。」「そう言えば、見ませんね。どこか具合でも悪いのではないですか」と。また、ある医師が詠んだ句に

「脳外科に頭の切れない医者もいる」

「眼科医に目先が見えない人もいる」

「耳鼻科医に鼻のきかない人もいる」

「胸部外科胸を開かむ医者もいる」

「腹部外科腹を割らない医者もいる」

知り合いに腹部外科の専門医がいるが、いつも何を考えているのかよくわからないうが、なかなかのつてこない。たまたまある会合で一緒になり、世間話をしているうちに、彼は、病院経営のことばかり悩んでいることがわかつた。問題なのは、彼の

『癒しのユーモア』(著者・柏木哲夫)より
「再手術生え揃つてもいいのに」
やるせない気持ちを吹き飛ばそうとしたすばらしい句だと思った。



清掃奉仕の御礼と次回のお願い



今年の報恩講お引き上げ清掃奉仕は、6月3日(日)に馬正面・桃園・直海浜・三ツ屋浜・坂田・上下浜・法音寺・金谷・東谷内・雁海・小萱・山谷の門徒さんにお願いする予定です。お手数をおかけしますが、何卒ご理解・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

年末のお煤払い清掃奉仕は、12月10日(日)に6区の皆様にお願いしたところ、たくさんの方々が来て下さいました。それまで天候に恵まれず、境内の落ち葉の片付けができませんでしたが、その日だけ快晴に恵まれ参加者の皆様のご協力によつて、境内の落ち葉などをきれいにすることができ、とても嬉しく思いました。

落ち葉をつめたビニール袋が全部で約50袋にもなりました。

ご参加頂いた方には心より御礼申し上げます。おかげさまで清々しい気持ちで新年をお迎えすることができました。

「新1年生を祝う会」

4月8日(日)午後1時半～3時

「初参式」

5月13日(日)午後1時半～2時半

(昨年1月～12月に生まれた赤ちゃんとこれまで欠席された赤ちゃん)

参加費は共に1000円です。

「初参式」並びに 「新一年生を祝う会」開催のご案内

浄福寺では、毎年4月に「新一年生を祝う会」を、

5月に「初参式」を左記のように開催しています。

「初参式」は、ご誕生になられたことを阿弥陀様に報告し、感謝の気持ちを伝えるという式です。そして、そのあかちゃんが成長して一年生になつたときに、また改めて「新一年生を祝う会」で、お祝いさせていただいております。

しかしながら近年「初参式」に該当される方を把握することがなかなかできなくなりました。あかちゃんが生まれて、まだお寺にお参りされていない方は、浄福寺までご連絡下さい。

「一年生」のお祝いでは、6区の布施静枝さんが、子どもたちに絵本の読み聞かせをしながら、いのちの大切さをお話しして下さいます。記念品として、「初参式」では子供用のお念珠と紅白のお饅頭を、「新一年生を祝う会」では親鸞聖人の御幼少の頃をモデルにした合掌人形とおやつをお渡ししております。

該当される方は是非お知らせ下さい。浄福寺の本堂で御一緒に祝いいたします。



